世田谷パブリックシアター
三軒茶屋発、地域の劇場による活動紹介冊子［キャロマグ］
Vol.8 Feb.2016
2016年2月号

CarroMag.

「めばえ学級」と
「目の教室」へ！

ワークショップ・レポート

かなりゴキゲンなワークショップ巡回団 特別支援学級（通級）編

三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」（600席）と「シアタートラム」（200席）という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、その活動は劇場での上演活動に留まりません。3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを行っています。キャロマグ（CarroMag.）は、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期でご紹介する冊子です。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。

Back Number
バックナンバー

Vol.1　2013年3月号
ワークショップ・レポート
「地域の物語」2011-2012
1960年代の世田谷

Vol.2　2013年4月号
ワークショップ・レポート
高校生のための
演劇ワークショップ'12

Vol.3　2013年11月号
ワークショップ・公演レポート
ユース・パフォーマンス2013
トバズニハ『コンパス グルグル』

Vol.4　2014年2月号
レクチャーレポート 2013
舞台芸術のクリティック

Vol.5　2015年1月号
ワークショップ・レポート
世田谷のこえ アーカイブ
プロジェクト2012-14
世田谷で暮らす――
移り住むこと、移り住むひと

Vol.6　2015年2月号
ワークショップ・レポート
世田谷パブリックシアター
演劇部　中学生の部

Vol.7　2016年3月号
ワークショップ・レポート
かなりゴキゲンな
ワークショップ巡回団
学芸会編

CarroMag.

Vol.8 | Feb.2016

CONTENTS

ワークショップレポート

かなりゴキゲンなワークショップ巡回団 特別支援学級（通級）編

劇場が特別支援学級（通級）へ行くこと　恵志美奈子 …… 2

通級学級の学校教育上の位置づけ　吉田梨乃 …… 3

事例紹介1　千歳台小学校「めばえ学級」 …… 4

［座談会］　見るだけ、真似するだけでもいい …… 8

［寄稿］　めばえ学級に通って　柏木陽 …… 10

一緒に歩こう　青山公美嘉 …… 10

通級の演劇ワークショップで見えてきたもの・つかんだもの　吉田梨乃 …… 11

事例紹介2　笹原小学校 弱視通級指導学級「目の教室」 …… 12

［座談会］　「それならできる！」の積み重ね …… 16

［寄稿］　価値ある笑顔　富永圭一 …… 18

子供たちのまなざし　吉田大紀 …… 19

CarroMag. Information

学芸からのお知らせ …… 20

学芸スタッフから

おまけマンガ『たまにはこんな役 #8』

編集後記

劇場が特別支援学級(通級)へ行くこと

恵志美奈子（世田谷パブリックシアター）

世田谷パブリックシアターでは、世田谷区立小中学校で行う演劇ワークショップ事業『かなりゴキゲンなワークショップ巡回団』(以下、「巡回団」) を、2003年度より始めました。毎年4月から5月にかけて募集チラシを各学校にお送りし、それを見てご連絡下さった先生、劇場スタッフ、進行役とで打ち合わせを行い、目的や内容を検討しながら実施しています。2014年度には小学校と中学校併せて29校、延べ283回学校を訪問しました。キャロマグvol.7では通常の学級での「巡回団」の学芸会に向けた活動を特集しましたが、今回は「特別支援学級（通級）」における「巡回団」に焦点をあてます。

とはいえ、「巡回団」での「特別支援学級（通級）」の取り組みが、通常の学級のそれと大きく変わるわけではありません。通級でも、通常学級でも、「巡回団」が学校でやることはいつもシンプルです。そこにいる全員で演劇をつくるやり方を提案し一緒につくっていくこと。演劇は、子どもたちがその違いによって排除されることなく、共に作業する場をつくりだします。自分の考えをまとめて人に伝えること、人の話を聞くこと、受け入れること、身体で体験すること、表現すること。そのプロセスで子どもたちはさまざまな体験をし、そこに学校の先生方は学習の見地からみた「学び」の要素を発見して下さいます。どちらの学級でもそういう意味では同じように進行しますが、通級では、対象となる子どもの数が通常学級よりも少ないこと、課題がより具体的であることにより、一人ひとりの子どもに添ったプログラムが可能となっているとはいえるでしょう。

通級に通う子どもは、通級以外の時間は学区の通常学級で過ごしています。そう考えると、通級の子どもたちの支援では、通級での個別の演劇ワークショップの実施だけではなく、その子どもたちの通常学級での演劇ワークショップも並行して行うなど、複数の学校で連携しながら包括的な活動ができれば理想的だと思います。通常学級での「巡回団」では、通級に通っている子どもたちに特別に焦点をあてることはありません。ですが、学級という一人ひとりが異なる小さな社会で、互いを認め合いながら「演劇をつくる」体験は、通級に通う子どもとそれ以外の子どもの関係性に変化を生むきっかけとなります。また、先生がたには、学習面からの障害や支援の必要の有無に基づいたフィルターを外した眼で、子どもたちの違う面を発見してもらう機会とすることもできるでしょう。

文科省による特別支援教育の理念では、特別支援教育の充実と共に、通常学級での一般の子どもも含めた学びの場の生成の重要性、そして障害の有無や違いによって差別されることなくすべての人が活躍できる「共生社会の形成」が構築されることが謳われています。世田谷パブリックシアターも、そのような社会を目指し、通常学級や通級、そして特別支援学級（固定）などに伺いながら、演劇を通じた地域づくりを行っていければと思っています。

特別支援教育の現状

特別支援学校

視覚障害、聴覚障害、知的障害、
肢体不自由、病弱・身体虚弱

小学校・中学校

特別支援学級

視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、
病弱・身体虚弱、言語障害、自閉症・情緒障害

通常の学級

通級による指導

視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、
言語障害、自閉症、情緒障害、学習障害(LD)、
注意欠陥多動性障害(ADHD)

通級学級の学校教育上の位置づけ

吉田梨乃（東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科博士後期課程）

通級による指導とは、小学校および中学校の通常の学級に在籍し、通常の学級におおむね参加できるものの、一部特別な指導を必要とする児童・生徒に対して、障害に応じた特別の指導を特別な場で行う教育形態です。なお、この制度は1993年の学校教育法施行規則の一部改正により定められました。対象となる障害は同規則第140条において、次の分類で定められています。

1. **言語障害者**
2. **自閉症者**
3. **情緒障害者**
4. **弱視者**
5. **難聴者**
6. **学習障害者**
7. **注意欠陥多動性障害者**
8. **その他（肢体不自由、病弱および身体虚弱を指す）**

特別支援学校は、学校基本法の改訂により、2007年にそれまでの盲・ろう・養護学校という名称から変更になりました。ここでの対象となる障害は、視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱およびこれらの重複障害です。一方、特別支援学級とは、学校教育法の規定に基づき、通常学級での学習では十分に効果を上げることが困難な場合に、特別に編成された学級です。東京都では、知的障害、肢体不自由、自閉症・情緒障害、病虚弱の特別支援学級が、一部の小学校・中学校に拠点的に、固定制で設置されています。

通級は、こうした特別支援学校や特別支援学級に在籍するのではなく、通常学級に在籍している障害をもった児童・生徒のための制度といえます。指導の内容は、特別支援学校小学部・中学部の学習指導要領を参考に、自立活動や各教科の内容の補充となります。自立活動は、障害による学習上または生活上の困難の改善または克服が目的です。具体的には、挨拶や人とのかかわり方などの社会性を学ぶソーシャルスキルトレーニングや、世田谷パブリックシアターが行っているような演劇ワークショップなど、児童・生徒の課題に沿った活動を行います。児童・生徒が通級に通うのは、おおよそ週に1日程度です。在籍する小学校に通級がない場合は、他校通級も行うことができます。つまり、通級に通う児童・生徒は学校生活の大半は通常学級で過ごしています。そのため、通級の指導はより通常学級の担任と連携を密にし、通常学級での学習面と生活面をともに豊かにするために行われることが望まれています。こうした通級の制度は、今後ますます拡充することが期待されています。

参考文献…東京都教育委員会『特別支援学級（固定学級・通級による指導）教育課程編成の手引』東京都教育庁指導部、2010年

よしだ・りの／90年生まれ。東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程在籍。専門は小学校での演劇ワークショップ。小学校で演劇ワークショップが実践される過程に着目し、現在は教師とワークショップファシリテーターの協働をテーマに研究している。

事例紹介 1

千歳台小学校「めばえ学級」

千歳台小学校「めばえ学級」は、世田谷区に13学級ある「情緒障害」の児童を対象とした通級のひとつです。同年齢の集団の中でうまく力を発揮できないでいる小学校1年生から6年生までの児童が、人とのかかわり方を学ぶために週に1回、それぞれ籍のある学校から決まった曜日・時間にこの学級へやってきています。世田谷パブリックシアターは、2014・15年度と「めばえ学級」へ「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」として訪問しました。

2014年度は、1クラスで実施しました。進行役・劇場スタッフ・先生方で何度も打合せをし、演劇ワークショップが情緒障害指導へどのように活用できるのか模索しながら進めていきました。2015年度は、「めばえ学級」から「自分の考えを表現して、グループ内で意見交換ができるようになること」、「グループ活動が難しいといわれている児童もグループ活動に参加できるようになること」を目標としたいという提案があり、3クラスで演劇ワークショップを行いました。

世田谷パブリックシアター
巡回団を依頼した経緯

世田谷区立千歳台小学校「めばえ学級」教諭　酒井 聡子

初めて世田谷パブリックシアターの存在を知ったのは2014年5月でした。学校に配布された、「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」のパンフレットを拝見して、何か「めばえ学級」で活かせることはないかと巡回団の事例発表会に参加しました。そこでは、活動の進め方や具体的な手立てを知ることができました。例えば“シェイプ”のような課題では、「提示する題材を動きのないものから始めるとよい」というように、学級で取り組む上での配慮事項も教えていただきました。事例発表会を通して「演劇からのアプローチで、子どもたちが心を開放して人とかかわることの心地よさをあじわえるようになるのではないだろうか」と感じ、実施に向けて学級で話し合いました。

そして「子どもたちに表現活動を通して自分の考えや気持ちを伝え、相手に受け入れられる経験を積み重ねることで自己肯定感を高めてほしい」との考えから、世田谷パブリックシアターの方々に巡回団をお願いすることにしました。

これまで（2014年度～ 2015年度）の活動

2014年度　　進行役：柏木陽（NPO法人演劇百貨店）

［木曜クラス］「めばえ学級」の紹介ビデオをつくる

回数…全4回　　**日程**…2014年9月11日（木）～ 2015年2月26日（木）

参加…6年生3名

シャイだったり、こだわりがちょっと強い児童たち3名と一緒に、次年度に千歳台小学校「めばえ学級」へやってくる1年生に向けた、学級紹介ビデオをつくる活動を行いました。「めばえ学級」の中で紹介したい場所や普段遊んでいる道具、自分が考える学級の魅力を表現した写真を撮り、それらに紹介のナレーションを重ねて紙芝居のようなビデオをつくりました。

2015年度　　進行役：青山公美嘉（NPO法人演劇百貨店）

［水曜クラス①］2つの絵本の内容を組み合わせた劇をつくる

回数…全4回　　**日程**…2015年9月9日（水）～ 11月25日（水）

参加…2年生4名

［水曜クラス②］フシギな写真をたくさん撮って、お話をつくる

回数…全4回　　**日程**…2015年9月30日（水）～ 11月25日（水）

参加…6年生3名

［木曜クラス］絵本をもとに言葉を使わない劇をつくる

回数…全4回（＋特別編1回）　　**日程**…2015年10月22日（木）～ 12月10日（木）

参加…2年生1名、3年生2名

水曜クラス①

4名（2年生）

1回目（9月9日）

はじめまして！

自己紹介をしてから、シアターゲーム。それから、全員で東京タワーやスカイツリー、動物園を身体で表現。みんな身体を使って動きながらイメージを共有することが得意だと発見。

↓

2回目（10月28日）

絵本を読んで、気に入った場面を劇にする

絵本『おばけドライブ』（作・絵：スズキコージ）を読み、気に入った場面をストップモーションでつくり、動きとセリフを付け加える。つくったシーンをつなげて、発表。

↓

3回目（11月4日）

絵本をもとに、オリジナルの場面を考える①

絵本『いっぽんみちをあるいていたら』（作・絵：市居みか）を読み、場面を身体表現。最後は道の両側から大きなお神輿がやってくる、オリジナルの“お祭り”ができた。

↓

4回目（11月25日）

絵本をもとに、オリジナルの場面を考える②

児童一人ひとり自分で考えたロケットの形をグループに演出。その後は2、3回目の活動を組み合わせて、一本道の向こうからおばけスポーツカーがやってくる場面をつくり、発表。

水曜クラス②

3名（6年生）

1回目（9月30日）

はじめまして！ みんなのことを教えてね

自己紹介。互いに質問をしているうちに、みんなホラー好きだと分かったので、次回以降のテーマをホラーに決める。それから、全員で“おもてなしをする仕掛けのある椅子”を身体で表現。

↓

2回目（10月28日）

ホラー写真を撮る

心霊写真のように見える写真をいろいろ工夫して撮影。そんな工夫の中から、“どろどろ”という全身真っ黒のフシギな生き物（?）が誕生！

↓

3回目（11月4日）

フシギな写真をたくさん撮る

もの（アルミ皿、カラーフィルター、毛糸、黒い布、懐中電灯、ボールなど）を使い、角度やタイミングを工夫して、フシギな写真を撮る。前回誕生の“どろどろ”には、みんなの意見で懐中電灯の光る眼、真っ赤な毛糸の口が！

↓

4回目（11月25日）

撮った写真をつなげてお話をつくる

前回までに撮りためた写真から一人4〜5枚を選んでつなげて、お話を考え、一人ずつ発表。それを何回もくりかえしてたくさんのお話をつくった。“どろどろ”はみんなの人気登場人物に。

木曜クラス

3名（2年生1名、3年生2名）

1回目（10月22日）

はじめまして！ 他人の動きからイメージをふくらませてみよう

自己紹介をした後、見えないボールでキャッチボール。その後はジェスチャーでしりとり。他人の動きからイメージが膨らむようになってきた。

↓

2回目（11月12日）

絵本を読んで場面をつくる

絵本『シルクハットぞくはよなかのいちじにやってくる』（作：おくはらゆめ）のシルクハット族は夜中の一時にやってきて、“ちょっとだけ”何かをして去って行く。その“ちょっとだけ”が何かみんなで考えて場面にしてみる。

↓

3回目（11月19日）

シルクハット族の登場シーンをつくる

シルクハット族の決めポーズを考えて、音楽に合わせて動いてみる。ダンスのようなシルクハット族の登場シーンができた！ 新しい“ちょっとだけ”も考えて、登場シーンと合わせて発表。

↓

4回目（12月10日）

声を出さずに動きだけで伝える劇をつくる

シルクハット族の決めポーズから登場シーン、使う音楽、“ちょっとだけ”を話し合い、配役も変えて、「めばえ学級のシルクハット族」を完成。動きとタイミングを何回も頑張って練習し、発表！

特別編（11月26日）

3名中2人が欠席だったため、出席児童1人との活動。児童が選んだ絵本『じごくのそうべえ』（作・絵：田島征彦）を先生・進行役・劇場スタッフをふくめた4人で相談しながら、始めから最後までを劇にする。その後、職員室の先生たちに発表！ 児童が自ら、先生・進行役・劇場スタッフに読み聞かせを行ったり、一人で何役も演じたり、児童の新たな面がいくつも発見された。

見るだけ、真似するだけでもいい

千歳台小学校　石毛正美教諭、伊藤拓郎教諭、酒井聡子教諭、福田美幸教諭

――「めばえ学級」について教えてください。

石毛…集団での不適応を起こしている子を対象に、週1日、2～4時間、指導しています。個別学習とグループ学習を通して、小集団の中で気持ちをあらわすスキルを発揮できるようにし、より大きな集団である所属校の学級に適応してもらおうと。まずは3～4人のグループで様々なコミュニケーション力を高めて、言葉の力を付けることを目的に置いています。

――通級学級に子どもたちが来るきっかけは？

石毛…（保護者が）幼稚園の先生から総合福祉センターに相談することを勧められるのがオーソドックスなケースです。そこで就学相談をして、行動観察を受けて、通級にも通うことを提案されます。もう一つは、実際に小学校に入ってみたら教室でうまく適応できない子たちが学年の途中から通級に来ます。

酒井…「めばえ学級」では、ジェスチャーで自分の気持ちを表現する活動をしていますが、なかなか表現できないお子さんに、より良い指導法がないかと悩んでいました。その時に世田谷パブリックシアターの、通常学級での実践事例を聴いて、最大でも（教員数の関係上）4人しかいない「めばえ学級」にも巡回してもらえるかとお尋ねしたんです。

「とりあえず撮ってみよう！」

酒井…2014年度は6年生3人のグループで、自己表出が固い子たちでした。もうすぐ中学生だし、外部から来た人たちにも心を開けるといいなと思って、パブリックシアターと相談しながら進めました。女の子の1人が最初（ファシリテーターの）柏木陽さんが苦手だったんですけど、3回目くらいから嫌じゃなくなったらしいです（笑）。

福田…固い表情だったのが次第にほぐれていきました（笑）。男の子1人、女の子2人の3人クラスだったんですが、もう一人の女の子が巡回団をすごく楽しみにしていた影響もあったのかな。女の子同士は関わりが増えてすごく仲良くなりました。ワークショップをやる前はあいさつもなくて別々に過ごしてたのが、手をつないだり一緒に遊ぶようになったりして。

石毛…逆に男の子は、2:1になっちゃったのでちょっと入りづらかったかな。

福田…少人数の難しいところですね。でも、彼も活動自体は楽しんでやってたと思います。

石毛…みんなで作る中で、一致点を見出して活動していくのが柏木さんのプランニングでした。スチール画像をつなげて、これから入る人に「めばえ学級」を紹介する映像を作ったんです。動画にすると編集が難しいけど、スチールなら簡単にできますから。教員側はシーンの構成を事前に一生懸命考えたんだけど、柏木さんは「音声は後付けでいいからとりあえず撮ってみよう！」と言って、動きながら考えていったのがよかったです。

酒井…教室にあったバランスボールとか、引っ張って遊ぶ台車とかを撮って遊び道具の紹介をしたり、グループでゲームをしたりしてるシーンも入れたりしました。活動最後の日には、学級内で完成した映像の鑑賞会をしました。また、2015年度になってから「めばえ学級」にやってきた新1年生にも、オリエンテーションの時間にこの映像を見てもらいましたよ。

観客役でもいい

――翌年の2015年度はどんな活動を？

伊藤…2・3年生のグループは、絵本のストーリーをもとに決めポーズを考えたり、音楽を入れたりして劇を作りました。保護者は呼ばずに、「めばえ学級」教員を観客に見立てて学級内で発表したのですが、ビデオに撮って残してあります。

福田…6年生のグループは、最初の活動で自己紹介をした時に児童全員がホラーや不思議なことが好きだとわかったので、心霊写真のようにみえる写真や、ボールが浮かんでるように見える不思議な写真を撮りましたね。

酒井…2年生のグループは、絵本を読んで新しい登場人物を考えて演じることもやりました。相手と自分の考えを受け止め合うことで自己肯定感を高めたいとか、みんなで何かをつくる楽しさを経験してほしいとか、グループごとにやりたいことは違うんですけど。

伊藤…僕が受け持ってた子は新しいことを考え出すのが苦手だったので、もともと絵本にあるシーンを声だけで演じたんです。

福田…彼は2回目にやった時は観客役になったんだよね。

伊藤…「ぼくはやらない。見てる」と。

石毛…でも、観客役も必要なんだよってパブリックシアターの方が言ってくれたのが良かった。「見る役をやってね」って。そこに彼なりの場を得たのかなって。

福田…すんなり観客役を受け入れられたわけでもなかったけど、他の子の劇が始まると集中して楽しんでましたね。自分でストーリーを考えるのが難しいんです。

伊藤…本人の中にすでにイメージがあって、頭の中で映像を思い描けるものは、できる。

福田…昔話は実際には知らないものだから、「桃太郎」のワンシーンを思い浮かべることはできないけど、現代のものならイメージできたり。

伊藤…そういうふうに、劇づくりを通して、それぞれの子たちの苦手なことがわかったのも大きいです。自分なりのポーズを考えられなかった子も、好きな人のポーズの真似でいいんだよって言ってもらうことで、お笑い芸人のポーズで参加できたり。「できるようになったじゃん」って声をかけたらすごく嬉しそうだったんです。苦手意識から一歩脱却できた姿を見られたのはすごくよかったなあ……。声かけのプロというか、一言でやる気を引き出してくれるパブリックシアターの技を、ぜひ盗ませていただきたいと思いました。

パブリックシアターの「技」を盗む

――演劇と「めばえ学級」の相性についてはどう感じますか。

伊藤…良いと思うのは、身体を使うものはやり直しがきくことですね。

福田…絵を描くことや歌うことに比べて、演劇は技能を求められないですよね。思いつかない時はただ真似するのでもいい。自分の意見がすぐ反映されて、かたちになる。しかもそれが、みんなでやる表現になる。拒否されることなく受け入れてもらえるところが、心地よかったんじゃないかなと。

酒井…「これは何のポーズなの？」「○○だよ」「そうか！」っていうやり取りの中で「自分はこれでいいんだ」っていう自己肯定感が生まれましたね。

――保護者の皆さんはどう思ってらしたんでしょうね。

福田…去年の子たちは本当に活動を楽しみにしてて、人とのかかわりが増えて友だちもできて、成長がみられたので、お母さん方も喜んでいらっしゃいました。

――発表会は見にいらっしゃる？

酒井…迎えに来た時に見るくらいですね。みんな、親には見られたくないっていう気持ちは強いから。柏木さんとは楽しくやってたけど、親が来ると動けなくなっちゃうということもあるんですね。だから今年はやってるところはまだ見てもらってないんだけど、「グループ活動が子どもの社会性を育てるのに役に立ってると思います」という言葉はいただきました。

伊藤…やってるところを見てみたかったとは言われましたね。児童がひとりしか来ない日があって、『じごくのそうべえ』っていう絵本を最初から最後まで、休憩もなしで100分くらい集中して演じたんですよ。（p7参照）

――2年間やってみて、世田谷パブリックシアターにご意見ご要望はありますか？

石毛…活動自体の有意義さでいうと、カリキュラムの中に入れてもいいくらい。でも、義務になってしまうと自由さが失われてしまうかな……。取りたい時に選べる「カフェテリア方式」みたいにできるといいですよね。パブリックシアターの演劇には、台本（筋書き）のないおもしろさがあるけど、カリキュラムでやろうとするとそれが必要になる。今みたいな形のまま、できれば費用的な面の補助制度ができるのがベストだと思います。ただ、「こういうのがいいらしいから」ってポーンと気軽に採用するのは難しいです。いろいろ配慮しなきゃならない子たちだから。最初は、もしかしたら劇薬かもしれないものを子どもたちに与えて大丈夫なのかっていう心配はありましたよ。でも打ち合わせと実践を繰り返していくうちに「いける！」って思ったし、今年はそれが3グループになった。できれば他のグループでもやってみたい。パブリックシアターさんの技を盗んで、僕らがその手法を使えるようになったらなおいいなと思ってます。

――劇場では「先生のためのワークショップ」もやっていて、依頼があればどこでも行きます。特別支援の先生向けにもできたらいいですね。今日はありがとうございました。

めばえ学級に通って

柏木 陽（NPO法人演劇百貨店）

かしわぎ・あきら／93年以降、劇作家・演出家の如月小春とともに活動し、アジア女性演劇会議事務局、兵庫県立こどもの館の野外移動劇ワークショップなど新たな演劇の可能性を探る現場に関わる。03年、特定非営利活動法人演劇百貨店を設立し、代表理事に就任。他セクターとの協働事業を企画する一方で、現在もワークショップの進行役として、全国各地の劇場・児童館・美術館・学校で、子どもたちと独自の演劇空間を作り出している。

私がめばえ学級に通ったのは2014年の秋から冬にかけて。3人の6年生たちと、めばえ学級を紹介する映像を作りました。彼らは出会った当初、とても引っ込み思案でシャイでした。これで何か出来るのだろうかと先生たちが考えてしまうのも分かるような気がしました。

私はまず、一緒に楽しく過ごす時間を持つことにしようと思いました。ちょっとしたことで取り乱しちゃう子、何かのきっかけで固まってしまう子。そんな彼らも楽しくしている間は、取り乱したり固まったりせず何かを考え形作る事が出来ていました。私には、彼らを矯正するようなことは出来ません。しかしだからこそ、私は彼らと関わっていくのです。彼らを外から変えるのではなく、彼ら自身が内から変わっていく力を持てるように見守りたいと思っています。

私が出会った3人の中の1人は中学校に行ったら演劇部に入ると言っていたそうです。彼女はいずれ、演劇が多くの場合には、私たちが持ち込んだような、台本も役名もなくイチから作るものではないことを知ることになるでしょう。彼女が私たちと出会って感じたような時間や場所を持てることを、祈っています。

一緒に歩こう

青山公美嘉（NPO法人演劇百貨店）

あおやま・くみか／78年兵庫県生まれ。中学生の時から兵庫県立こどもの館劇団に参加。桐朋学園大学短期大学部演劇専攻にて学ぶ。卒業後渡英し、大道芸人として活躍。帰国後NPO法人演劇百貨店にファシリテーターとして参加。現在は都立若葉総合高校の演劇の授業を担当しながら日本各地の学校、市民館などで演劇ワークショップを行っている。

私が一番戸惑ったことは彼らの持つ「こだわり」です。彼らはとても素直です。素直すぎるがゆえに、自分のこだわりが捨てられません。ストレートに「NO」を突き付けられたとき、どう対応するのがベストか？ 話し合うことか？ 諭すことか？ 彼らの思い通りにしてみるのか？ 答えはその都度異なります。

彼らに「NO」と言わせない程のエネルギーがこちら側にあればいいなと思います。それにはもっと大人数でがっつり彼らを巻き込んでいくようなプロジェクトがあればどうかな？と思います。通級は少人数クラスなので5・6人で行って、子どもたちがいろんなタイプの人間とかかわれるようにしたらどんな感じになるかな？と期待します。

彼らとの付き合い方は3回目くらいで掴めてきました。が、やっと慣れてきた4回目で終了です。これは少し寂しい感じがしました。

通級の演劇ワークショップで見えてきたもの・つかんだもの

吉田梨乃（東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科博士後期課程）

35から40人の児童が過ごす通常学級とは違い、個別の支援を重視する通級という場で、演劇ワークショップを行うことにどのような意義があるのでしょうか。

小集団のなかでのわたし――「今日は○○ちゃん」

今回の演劇ワークショップでは、毎回「呼ばれたい名前」を決めるところから始まりました。これは、朝学活で行う「健康観察」のようです。進行役は毎日学校にいるわけではないので、ワークショップの初めに子ども一人ひとりの様子をみていきます。

演劇ワークショップ4回目の最終日、Aちゃんが「呼ばれたい名前」を言うときのことです。彼女はそれまで言っていた名前ではなく、全く新しい「呼ばれたい名前」を言いました。普段は姓の前半をあだ名で呼ばれることが多いのですが、今回は姓の後半部分をあだ名にしていました。これには進行役も、担当の先生も驚きでした。ワークショップ後に、担当の先生がなぜ呼ばれたい名前を変えたのかを聞くと、「呼ばれたことなかったから」と答えていました。

通級は、通常学級に比べると少ない人数で演劇ワークショップを行います。少人数のなかでは、より一人ひとりの気持ちや行為を受け止め、汲み取ることができます。「呼ばれたことがなかったから」と新しい呼び方を主張した彼女も、きっと、数回のワークショップを通して、担当の先生とは違ったおとなに出会い、なにか新しいことに挑戦したいと思ったのではないでしょうか。

先生ではないおとなの存在

ケストナーの『飛ぶ教室』には、正義先生と禁煙先生という人物が登場します。正義先生は、そのあだ名の通り厳しくも正しい舎監の先生です。一方、禁煙先生は、主人公たちに信頼されていますが、教師ではなく、近所の廃車になった禁煙車両にすむ人物です。心理学者の河合隼雄は「その成長にあたって、正義先生も禁煙先生も両方必要としている」といい、思春期におけるおとなの存在を考察しています。演劇ワークショップの進行役は児童期・思春期の子どもにとって禁煙先生のような存在といえます。

ドドドドーっと言いながら自衛隊への興味が止まらない男の子のアイディアを大切に活動に取り込んでくれる進行役は、学校の先生とは異なる接し方をします。そうした通級での演劇ワークショップは、子どもが表現する場として、より一人ひとりの課題に寄り添う形で実現できる場になっていくと考えています。

事例紹介 2

笹原小学校 弱視通級指導学級「目の教室」

笹原小学校 弱視通級指導学級「目の教室」は、世田谷区内で唯一の「弱視」の児童を対象とした通級です。小学校1年生から6年生までの「目が見えにくい」児童が週1回の個別指導と、月1回の集団活動の日に通ってきています。

世田谷パブリックシアターでは、2010年度から「目の教室」での「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」を実施してきました。最初は、人前での表現に親しむための単発のワークショップや、調べ学習のサポート等で関わってきましたが、2013年度には「目の教室」が笹原小学校の学芸発表会で発表するビデオ作品をつくるお手伝いをしました。

隔年開催の学芸発表会がなかった2014年度は「目の教室 発表会・お別れ会」に協力しました。「発表会・お別れ会」は、「目の教室」の児童一人ひとりが、年度末に1年間の学習の成果を保護者や通常の学級の担任の先生、拡大写本ボランティアの方など、お世話になっている方に向けて発表するものです。「見えにくい」ために扱いが難しいミシンでつくったトートバックを紹介したり、自作の俳句を発表したりしています。

2015年度は学芸発表会のビデオ作品づくりと、「発表会・お別れ会」のお手伝いをしています。今号では、学芸発表会のビデオ作品づくりについてご紹介します。

世田谷パブリックシアターとの出会い

笹原小学校 弱視通級指導学級「目の教室」担任　細田 元江
川嶋 栄子

6・7年前、笹原小学校の通常の学級に、世田谷パブリックシアターの方々が劇指導をされている場面を見たのが初めてでした。「目の教室」では、3月の「目の教室 発表会・お別れ会」で司会担当の児童2名が大きな声ではっきり言えるようにと世田谷パブリックシアターに、発声やリラックスのレッスンを依頼したことにさかのぼります。

「目の教室」の児童の中には、見えにくく、他人の顔の表情を読み取りにくいため、「自信がない」「何と言ってよいかわからない」ことから、人前で話すことに苦手さを感じている子や、表現する楽しさを味わったことがない、成功体験が少ない子もいました。言葉によるコミュニケーションを苦手としている子どもたちに、表現する楽しさ、伝わったときの喜びなどを体験してほしいとの思いから、以来毎年、世田谷パブリックシアターの方に指導をお願いするようになりました。

月1回行っている集団活動（通級児童が全員集まって活動する）にお招きして、表現遊びをしたり、学芸発表会で発表するビデオ作品の制作に携わっていただいたり、3月の「目の教室 発表会・お別れ会」での個人発表の企画、演出をアドバイスしていただいたりと、多岐にわたる活動を通して「目の教室」の児童に関わっていただいています。

これまで（2010年度～2015年度）の活動

2010年度　人前での表現活動に親しむための演劇ワークショップの実施（「目の教室 発表会・お別れ会」の司会を担当する4・5年生を対象に行った）

2011年度　沖縄調べ学習のサポート（鬼餅（ムーチー）づくり、エイサー、三線、沖縄の唄などの体験学習のプログラムを先生と検討。その様子を記録した映像を作成した）

2012年度　出張動物園（多摩動物園、主に昆虫についての学習）、校外学習（上野動物園サマースクール）の体験や、夏休み中の読書による調べ学習の成果発表のサポート、及び記録映像の作成

2013年度　笹原小学校学芸発表会で上映するビデオ作品『アリス イン 目の教室』の制作

2014年度　「目の教室 発表会・お別れ会」での学習成果発表のサポート

2015年度　学芸発表会で上映するビデオ作品『ゆめの教室』の制作

沖縄についての調べ学習（リサーチ）

沖縄についての調べ学習（エイサー体験）

出張動物園（昆虫についての学習）

ビデオ作品『アリス イン 目の教室』の制作

事例紹介2　笹原小学校「目の教室」

ビデオ作品の制作プロセス（2015年度）

「目の教室」の児童は、普段通っている学校での学芸会や学習発表会があるため、笹原小学校の学芸発表会に全員が集まって発表することができません。そこで「目の教室」の児童全員が出演し、「目の教室」を知らない通常学級の児童や保護者の方への学級紹介にもなるビデオ作品をあらかじめ作成し、発表しています。

日時　2015年9月15日（月）～11月4日（水）（全3回）
対象　小学1年生～6年生　13名
進行役　富永圭一（ワークショップ進行役）
撮影　吉田大紀（映像作家）

先生との打ち合わせ①　7月17日（金）放課後

先生方から、今年の「目の教室」の子どもたちの様子を聞く。まずはビデオ作品のお話の大筋を検討。今年度は、新入生が3人、転入生が1人いるということで、彼らが「目の教室」を探検して、色々な人に出会うというストーリーを考える。ビデオの中で出会う登場人物は、児童一人ひとりから「なりたいもの」や「やりたいこと」を聞き、そこからオリジナルのキャラクターを一緒に考えることにする。

↓

ワークショップ①　9月15日（水）・16日（水）・18日（金）・24日（木）

進行役と児童が知り合う。一人ひとりの「なりたいもの」や「やりたいこと」について詳しく話を聞き、どんな登場人物になるか、次回までに何を準備してきたらよいかを一緒に考える。

※9月9日（水）の集団活動で全児童対象のワークショップを実施する予定だったが、台風の影響で登校中止となったため、個別指導の日に進行役が訪れて児童と相談したり、直接話せない児童は代わりに先生と話してもらった。

↓

先生との打ち合わせ②　9月24日（木）放課後

ストーリーの細かい部分を考える。「遠足中の保育園の保育士さんと子どもたちが、妖精に助けを求められ、海賊に変身する。途中で、猫や天才プログラマーの力をかりながら、戦国武将と剣士とサッカー選手に奪われた宝物の地図を取り戻し、宝物を見つける」というストーリーができあがる。

ワークショップ②　10月7日（水）14時～15時半

カメラマンの吉田さん、登場！ この日に、ほとんどのシーンを撮影する。自分の撮影を待っている間は、ほかの人の撮影を見学したり、自分のセリフの練習をしたり、小道具をつくったりする。宝物のなかみが「ゆ」という文字に決まり、皆が「ゆめ」を見つけるというストーリーがようやく完成！

↓

先生との打ち合わせ③　10月7日（水）放課後

撮影したシーン、次回に撮影すべきシーンのふりかえり。また、撮影中の子どもたちの様子を共有する。

↓

ワークショップ③　11月4日（水）14時～15時半

10月の撮影を経て編集された映像を見る。10月に撮り切れなかったシーン、新しく必要となったシーンを撮影。完成をお楽しみに！

↓

発表　11月20日（金）・21日（土）　笹原小学校 学芸発表会

「それならできる！」の積み重ね

笹原小学校　細田元江教諭、川嶋栄子教諭

――目の教室について教えてください。

細田…「目の教室」は弱視通級指導学級で、通常の学級に在籍する子どもたちが週に1回通うクラスです。「自分は見えにくい」ということを自覚して、単眼鏡やルーペ、拡大読書器などの視覚補助具を使って学習できるようになることが目的です。遠くが見えにくい、近くが見えにくい、眩しいと見えにくい、視野が狭いなど、弱視といっても一人ひとり見えにくさが違います。世田谷区内と、稲城市、狛江市、府中市、三鷹市、目黒区など区外からも含めて現在13名が通級しています。東京都で小学校は8学級しかないので世田谷区外からも通って来ています。個別指導は週に1回、集団活動は月1回しています。

――世田谷パブリックシアターとの活動はいつ頃から？

細田…2010年度からです。その前の年に、笹原小通常の学級の子どもたちが、世田谷パブリックシアターのワークショップを受けているのを見て「えっ、初めて会った子どもたちを劇つくりのその場で、全員動かすの?!」と思って（笑）。しかも、ただやらせるんじゃなくて、子どもがみんなノッているんです。「目の教室」の子どもたちは人前で話すことを恥ずかしがることが多く、毎年3月に行っている「目の教室 発表会・お別れ会」の司会をリラックスしてできるようにならないかなと思ってお願いしました。

――進行役は富永圭一さんでしたね。実際にその年はやってみてどうでした？

細田…実は、ワークショップでは楽しんでいましたが、「発表会・お別れ会」の司会では緊張して、そんなに簡単にはいかないなと思いました……。子どもたちが変わるきっかけになればと願い、その兆しが見えるまでは続けようと、次年度も実施することにしました。

――2年目以降はどういう形で？

細田…2年目はパブリックシアターの方と一緒に、沖縄についての調べ学習のプログラムを検討し、取り組みました。子どもたちは目が見えにくいので、図書館での調べ学習が苦手です。そこで夏休み明けの調べ学習の発表会では円陣を組んで、ゲームみたいにゴーヤを触って感じたことを話し合ったり。11月にはエイサーを踊るグループを体育館に招いて一緒に踊ったりしました。そのような活動を通して、世田谷パブリックシアターの方に「見えにくいってこういうことなのか」と知ってもらういい機会にもなりました。

3年目の2012年は虫の調べ学習をしましたね。多摩動物園から昆虫を借りて拡大読書器で見ました。一人ひとりの子どものそばで、子どものつぶやき等、見ていただきました。子どもたちに表現の力をもっとつけてほしいという思いで、2013年度は学芸発表会に協力していただいたんです。

「ドラマに出た!!」

川嶋…私はその2013年度に異動してきました。それまでは中野区の弱視学級にいました。世田谷パブリックシアターとの取り組みのような事例が中野区にはなかったのでとても驚き、うらやましさを感じました。

細田…学芸発表会には、地域の方、親御さん、通常の学級の子どもたちに、目の教室を理解していただくためにも参加しています。「目の教室」の子どもたちは自分たちの学校でもそれぞれ学芸会があるし、集団活動の時しか全員揃いません。そこで、夏休み前に打合せをして『不思議の国のアリス』をベースに映像をつくることにしました。テーマは子どもたちの「なりたいもの」。「お寿司屋さん」、「のび太」、「ドラえもん」、「仮面ライダー」とか。アリスなら、どんなものがいっぱい出て来ても成立しますから（笑）。

川嶋…不思議の国の兵隊の写真は、夏休みに描いてきたトランプの絵を着て、みんなで9月に撮りましたね。

細田…出来上がった映像を見て、子どもたちがものすごく喜びました。

川嶋…「ドラマに出た!!」って（笑）。

細田…ウサギ役をやった、普段人前で喋るのが苦手な子どもが、その映像を「（在籍学級の）みんなにも見せたい」って言ってくれたんです。トミさん（富永圭一）と吉田さん（吉田大紀）がその子のこと本当に可愛く撮ってくれまして。

――うれしいですね。他の子どもたちや保護者の方の反応はどうでした？

細田…保護者もすごく喜んでくださって。見てくださった他の人も、「目の教室って素敵！」って、びっくりしてくれて。インパクトがありました。

川嶋…子どもたちも演じてるっていう意識はなく、自分がなりたいものに扮して、喋ったり動いたりしたものがいつの間にか作品になっている感じ。映像の中の子どもたちの表情が、普段の学校生活で見せる顔とは別人なんですよ。夢が叶った瞬間のいい表情をカメラが撮っている。これまでは周囲の人から「大変だね」っていう言葉をかけられることが多かったけど、「がんばってるね」っていう言葉をもらうことができました。

やりたがらない子をどう乗せるか

細田…学芸発表会は隔年なので、次の2014年度は、3月の「目の教室発表会・お別れ会」での学習発表を巡回団に手伝っていただきました。

川嶋…たとえば5年生の子が「家庭科のミシンの授業でトートバッグを作ったから紹介したい」ってトミさんに言うと、「ただ紹介するのじゃつまんないから、トートバッグの由来もみんなに教えてあげたら？」とか「ミシンの実演も見せてみたら？」っていう言葉でアクションを引き出してくれる。すると「それならできる」って子どもが食いついていくんですね。

細田…やりたがらない子をどうやって乗せるのかは課題ですね。「長く喋りたくない」っていう子には「じゃあ1分で読んでみせよう」って言って本気にさせちゃうところがトミさんのすごいところ。本当は自分はできるんだっていう自信を持ってほしかったんです。結果的にいちばん喋れなかった子どももみんなの前で台詞を言えましたし、お母さんに伺ったら、地域のクリスマス会での総合司会もやったんですって！　トミさんたちとやったことが積み重なってて、教室の外でもそこまでできるようになった。在籍学級でその力を発揮できることが目標です。まだ難しい子どももいますが、後押しがあればいずれできるようになると思います。

「ゆめの教室」

川嶋…今年2015年度は事前に子どもたちからやりたいことを聞いて、新しく入った1年生3人が探検隊になり、単眼鏡や拡大読書器などの視覚補助具を使って「目の教室」を探検するというストーリーは決まってたんです。でも子どもたちの希望で探検隊から海賊に変更になって、結局学年も関係なくなり、みんなで宝物を探しに行く話になりました（笑）。

細田…主役をひとりにはせず、どの子も出られるようにしました。

川嶋…見つけた宝箱を開けると「ゆ」って書いた紙がたくさん入っている。「ゆ＋めの教室」というわけです。

細田…卒業する6年生にみんなからカードをあげるんですけど、「目の教室」の集団活動で何年間も一緒に活動しても、顔の表情が見えないこともあって、「あの子どんな子だっけ？」ってなってしまうんです。だけど「学芸会であの役をやった子だよ」って伝えるとすぐわかる。そういう仲間を大事にしてほしいんです。弱視の子どもたち同士の関わりは、「目の教室」の他にはなかなかありませんから。

川嶋…子どもたちも仲間意識があるので、月1回でも、毎日会っているかのように、自分を出していいんだって安心感がありますよね。

――今後、世田谷パブリックシアターとの取り組みで挑戦したいことはありますか。

細田…通常の学級ではあまり自分を表現しない子どもたちにも、楽しいって思う部分を増やしてあげたい。トミさんのやり方を真似すれば、ひょっとしたら閉じている子どもを乗せることができるんじゃないかと思ってるんですけど、やっぱり真似出来ないなあって思います。学校教育と演劇の手法は全然違うのかな。ぜひ盗みたいんですけどね……（笑）。

川嶋…トミさんが「発表するのが嫌なのは自分が楽しくないからだよ」って言ってて。子ども自身がすごく楽しんで発表した結果、見ている人が引き込まれて、保護者も本人も大満足になる。そうやって子どもの自信を引き出すトミさんのやり方は素晴らしいと思います。喋りたくない子もいれば、喋りすぎる子もいる。どの子もありのままでいいよっていうことがすごく大事だなと思っているんですが、その感覚に立たないと教育も演劇も始まらないなと改めて学びました。これからもパブリックシアターからもっといろいろ刺激をいただきたいなと思っています。

価値ある笑顔

富永圭一（ワークショップ進行役）

当初、弱視という事をキチンと理解しておらず、通級の児童が、学芸会でビデオ発表会を行う為、月一でワークショップを行うという、ごく自然な依頼だと思っていました。

会ってみて、何ら視力的な問題を感じなかったので、通常、小学校で行うプログラムと大差のないものを行いました。何の問題もありませんでした。いつもの笑顔に溢れたワークショップでした。

その後、何年か断続的・継続的に伺うようになり、一人一人の児童と関係が深くなるにつれ、症状の違いがわかってきました。

軽度な児童もいれば、ほかのもっと重い症状を抱えている児童もおり、中には弱視が進行していき、もう少しで全然見えなくなってしまう児童もいました。

自分は、もうすぐ何も見えなくなる。この恐怖と向き合いながら、笑顔でいる。それを知った時、その心の強さと、笑顔に非常に驚き、感銘を受けました。

是非、私がワークショップで出会う人には笑顔でいてもらいたい。このことを、私は、ここで強く気付かされました。

とみなが・けいいち／89年世田谷パブリックシアターの前身である文化生活情報センターのワークショップに参加。以降、世田谷パブリックシアター、公共施設、学校などにおいて様々なワークショップを展開する。99年、ワークショップ・グループabofa創設。07年からワークショップファシリテーターとして、世田谷パブリックシアターと契約している。

子供たちのまなざし

吉田大紀（映像作家）

秋の学芸発表会でビデオ作品を流すこととなり、2015年も「目の教室」にお邪魔させていただきました。

私は撮影と編集を担当し、今回で5度目の「目の教室」ワークショップへの参加となりました。

当初は、ワークショップの様子を伝える記録映像を撮っていたのですが、2013年に学芸発表会での上映を目的としたビデオ作品を作る案が立ち上がり、今年も引き続き同様の企画で「目の教室」の子供たちが出演する短編ができあがりました。

子供たちは自分で演じたいものを演じ、衣装を着てセリフを言います。大まかなストーリーはありますが、巡回団の進行のもと、プロ野球選手や、魔女や、猫や、のび太など思い思いの登場人物となってカメラの前で演じます。突拍子もない登場人物たちを前に、一体どんな作品が完成するのやら、いつも期待（と不安）でワクワクしながら撮影をしています。

2013年に、初めてビデオ作品を撮るとのご相談を受けたとき、気になる点がひとつありました。ビデオ作品では会話のときに登場人物の視線が重要となります。会話のシーンで視線が外れていると、誰に向かって、どこに向かって喋っているのか分からなくなり視聴者は混乱してしまうのです。「目の教室」の生徒たちは弱視ですので、視線の誘導をどうしたものか私なりに悩んでいました。

ところが、いざ撮影がはじまると子供たちは勘が良く、こちらの言うことを理解し視線もきちんと演じることができました。私の心配は杞憂に終わり安堵もしましたが、同時に弱視についての自分の認識の甘さを反省したのを覚えています。

2013年の不思議の国のアリスに続いて今回も、妖精と海賊が宝探しの果てに武将やサッカー選手と対決する大胆な展開で、大変楽しく撮影させていただきましたが、子供たちの成長には目を見張るものがありました。2年前には恥ずかしがって声も小さかった子が、今回は朗々とセリフを発し、それどころか下級生を率先して導くような様子も見られ感激しました。

子供たちの闊達でユーモアのある様子が少しでも伝わればと思いながら編集を仕上げました 。もしまた機会があれば、子供たちの更なる成長と想像を超えるキャラクター造形を目撃したく、是非参加させていただければと思っています。

よしだ・ひろき／日本大学芸術学部演劇学科演出コース在学時から、世田谷パブリックシアター劇場部でアルバイト。以降、生活工房などでのワークショップや発表会のビデオ撮影・編集を担当。現在は会社員の傍ら自主映画の制作や、企業のWebCMの制作等を行っている。

学芸からのお知らせ

「先生のためのワークショップ 放課後編」

参加したい先生・学校 募集中!!

先生もワークショップを体験してみませんか?

世田谷区内の小中学校で実施している「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」の進行役が、放課後に学校へ伺って、ワークショップで活用する手法を具体的に先生方にお伝えします。

クラスづくりに活用できる演劇的手法を取り入れた遊びの紹介や、授業での活用方法、社会科見学や修学旅行の学習成果を伝える活動等の具体的なプログラムを提案・実践します。また、教科「日本語」の実践例として進行役が実施するワークショップを体験していただけます。一年中いつでも、5人程度から実施できます。学年、学校単位だけでなく、近隣の学校の先生と合同でもOKです。まずは、お気軽にご相談ください!

TEL 03-5432-1526
FAX 03-5432-1559

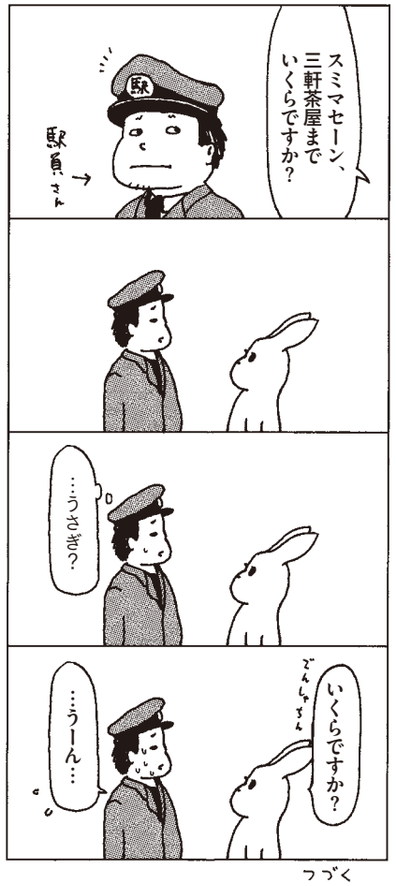
世田谷パブリックシアター学芸

学芸スタッフから

★妻に内緒で大型バイクを買おうと、いろいろ試乗にディーラー巡り。決まって言うのは「妻と一緒に旅行できるバイクを」。ある日届いた営業葉書。そこには「次回はぜひ奥様と」。おかげでバレました! 一緒に行くどころか、奥さまは呆れ顔でございます。[にら]

★きたるべき花粉症対策として毎日ヨーグルトを食べていたらけっこう調子が良い、と学芸スタッフのくたにんに聞いて、私も……! とはじめてみました。まだ一週間も続いていないので効果のほどは分かりませんが、骨粗鬆症予防にはなるかなあと思っています。できることはすべて試したい勢いなので、他にも良い方法があったら教えてください。[ふく]

たまにはこんな役 #8



編集後記

先日、フィリピンの山岳地帯にある村々の学校をめぐって、演劇のワークショップをしてきました。子どもたちは恥ずかしがったり、大胆に踊りを披露してくれたり、いろいろでしたが、演劇を通して何かを交わし合えたという手応えはすごくありました。「これが演劇だ」と教えに行ったわけではありません。むしろ「これも演劇だ」と教えられた気がします。

さて今号では、前号の「学芸会編」と同じく「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」を取り上げます。今回は「特別支援学級(通級)編」です。千歳台小学校「めばえ学級」と笹原小学校「目の教室」にご登場いただきました。

冒頭の「えっしー」こと恵志さんの文章に「演劇は、子どもたちがその違いによって排除されることなく、共に作業する場をつくりだします」とあります。演劇はいつも一人ひとりの味方です。それでいて他人と一緒に何かをつくれるという、魔法のようなもの。進行役(ファシリテーター)は、そんな魔法をたくさん知っている手品師みたいな人たちです。今回の2つの座談会では「進行役の技を盗みたい!」とのご意見が共にありましたが、この左ページをご覧いただけますか。先生向けの演劇ワークショップ、あります![ちから]

[キャロマグ]
Vol.8 / Feb.2016

発行日
2016年2月19日

発行
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4–1–1
Tel. 03-5432-1526
http://setagaya-pt.jp

編集
藤原ちから、落雅季子(BricolaQ編集部)

企画
恵志美奈子、九谷倫恵子、
田幡裕亮、福西千砂都、韮澤大地
(以上世田谷パブリックシアター学芸)

写真
笹原小学校 弱視通級指導学級「目の教室」
世田谷パブリックシアター学芸

デザイン
ウチカワデザイン

印刷・製本
株式会社リヒトプランニング

協賛
TORAY 東レ株式会社

後援
世田谷区

©2016 Setagaya Public Theatre

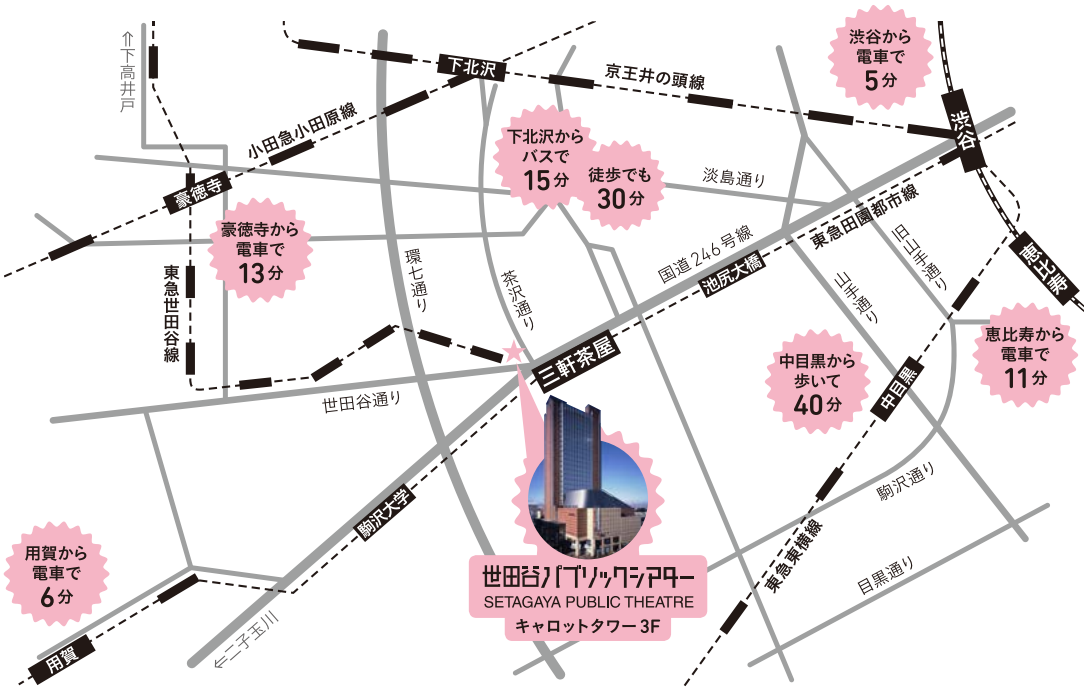
世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財) せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター (約600席)、シアタートラム (約200席) の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。

世田谷パブリックシアター (主劇場)

シアタートラム (小劇場)

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ 世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー5階

Tel.**03-5432-1526** (代表)　Fax.**03-5432-1559**

http://setagaya-pt.jp

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅前にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。

CarroMag. [キャロマグ] Vol.8 Feb.2016

通算第8号　2016年2月19日発行　(公財) せたがや文化財団・世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー5階　Tel. 03-5432-1526　http://setagaya-pt.jp